
流れるもの

矢越智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れるもの

【Nコード】
N0516Z

【作者名】
矢越智

【あらすじ】
夢束投稿済。
流れたのは何でしょうか？

「寒くなりましたね」

斉藤亜美が小声でつぶやいて、組んだ腕でぎゅっと肩を縮める。

「そうだね。もう十二月になるからね」

高橋祐二が穏やかに相槌を打つ。亜美には彼の顔が見えないので、その表情を知ることができない。二人を包む闇が濃いせいだ。ここは街頭一本見当たらない。しかも今夜は朔で月光すらも無く、満天の星は明かりとしては微力すぎる。二人の足元には砂利のように石がごろごろあつたが、それは遠い昔、山の噴火によって撒き散らされたものだ。

「なかなか流れませんね」

「そうだね。そう簡単に見られるものじゃないってことか」

「でも、前は結構見られたじゃないですか」

「うーん、あれは偶然かな。流星群とかきいているときじゃないと、流れ星って珍しいものなのかも」

「そっかー……残念です」

いじけたような亜美の口ぶりに、祐二がクスツと笑った。

「そんなに見たかったの？」

「ええ、だって、お願いしたいことがあるんです」

「ふうん、何をお願いするの？」

「秘密です」

祐二の隣に立つ亜美は、もどかしさで胸裏が燦られてチリチリするのを、身を震わせて耐えていた。

（今日がチャンスなんだから、伝えなくっちゃ）

「あ、あの……」

数メートル先の暗闇でコツツと石がぶつかる音がしたのに驚いて、ヒィッ、と引きつった悲鳴をあげたのは亜美だった。思わず祐二に身を寄せ、肩が触れた。彼女は祐二がハハハと軽く笑ったことに再

び驚いた。

「何で笑うんですか！ 幽霊かもしれませんよ！ 怖い！」

ツボに入ったらしく祐二はしばし笑い続け、理解できない亜美はその間も怯えていた。

「ビビりすぎだって！ 俺が石を投げただけだってば。本気で幽霊だと思ったの？ 可愛いねえ」

からかわれたと感じて亜美がムツとする。

「そうやって、いつも高橋さんは私の心を弄ぶ」

「何言ってるの。弄んでいるのは亜美ちゃんのほうでしょ」

「え……？」

刹那、真っ黒な空に光の一線が引かれた。

「あっ流れ星！」

亜美が指差しながら叫んだ時には、すでに消えて無くなっていた。

「はぐらかさないでよ。俺、ずっと好きだったんだよ」

どきつとして、心臓が一瞬高く鳴ったように亜美は思った。

「……好きって、私のことを、ですか？」

「そうだよ」と、祐二がしれつと返す。

亜美の顔に一気に熱が昇る。

「私も、高橋さんのこと、ずっと好きで」

「じゃあ、信義とは別れるの？」

二人の間に沈黙が流れ、期待や劣情が引き潮みたいに退いていく。コツリ、とまた石のぶつかり合う音がした。今度はさっきよりも近く、作意的にはつきりと聞こえた。

「……驚かさないでください」

「答えてよ。別れるの？ 別れないの？」

「別れません。私、結婚するんです信義、えっと沢口さんと。それは、変える気がないというか、沢口さんのことも愛していて、だけど、サークルの頃から高橋さんのこと好きで、結婚の前に伝えたくなっちゃって、今日は誘ってしまっただけですけど」

「亜美ちゃんのそういうところ、学生のころと変わってなくて、な

んか嫌」

凍りのように硬化した言葉が、亜美の胸にブスリと突き刺さる。気分が一気に零下まで冷え、喉が詰まり、ヒリヒリと痛み出す。表面張力の限界まで水を張った両目から、大粒の涙がボロリとこぼれた。一度溢れ出すと、せき止められなくなる。

「うっ、ヒッ、うっうっう……ヒッ」切れそうなくらい唇を噛んで、鼻をズビズビと水っぽく鳴らした。

「ごめん。亜美ちゃん、泣かないで。ごめん。ごめんってば……」

祐二は亜美を抱き寄せて、なだめながら優しく頭を撫で続けた。しゃくり上げていた声は少しずつ落ち着いていく。

「わ、私……高橋さんと、ずっと一緒にいたいって……お、お願い、したかったの……」

「そっか。それなら、一緒にいよう」

しおらしく泣きながら、亜美は心の中でほくそ笑んだ。

（本当に、男って女の涙に弱いんだから）

その時、あざ笑ったのは祐二も同じだった。

（泣いたら許されると思っちゃって。浅はかで可哀想な子）

沢口信義は、今夜三回目の電話を亜美にかけた。今回も二十回以上コールしているのに、出ないことに苛立って舌打ちをした。諦めて切ると、すぐに亜美から電話がかかってきた。

ごめん。友達と遊んでいて気づかなかった。

「ふうん、友達って誰？ 男？」

電話の向こうで亜美が笑う。

ふふっ何、疑っているの？ 女だよ。職場の人たち。急にご飯誘われちゃって。

「あっそ、良かったね」

信義はムカムカした気持ちを抑えられずに嫌味っぽい口調になったが、押し黙る亜美から不穏な気配を察して、態度を軟化させる。

「おいおい、冗談で言っただから、怒るなよ」

別に、怒ってないよ。何焦ってんのー。ばーか。

「『ばーか』じゃないよ。まったく……」

可愛くねえよ、という言葉は喉の奥に押し込んだ。うつかり貶す
とイラつかれて電話を切られてしまう。

何か用だった？

「用事が無いと連絡しちやいけないのかよ」

そういうわけじゃないけどさー。

(何だよ、その態度。気に食わないな)

信義は飲みかけだった缶ビールを一気にあおる。苦い後味が口の中に残った。ついでにゲップが出た。

汚いなー。最悪。

そう罵りながらも、可笑しそうにクツクツ喉を鳴らした。

「今度のテニスサークルの忘年会、行くの？」

ああ、うん。行こうかな。信義も行くんでしょ、どうせ。

アルコールがまわってきたのか、信義は頭がフワフワして、楽しい気分になってきた。亜美の投げやりな態度に親しみを覚えるくらいに。

「どうせってなんだよー。まあ、どうせ行くけど」鼻でへらへら笑
いながら返す。

じゃあ、私も行くって一緒に返信しておいて。

「何でだよ。別にいいけど。祐二に返事しておくな」

高橋さん？ 私、真紀ちゃんからお知らせメールきたけど。

「二人で幹事やってるんじゃないの。知らないけど」

……ふうん。皆、元気でやってるかな？ 結婚発表するの私
ちだけかな？！

「さあ。あー、でも祐二と花ちゃんは別れたよ」

えー、そうなの！ 知らなかったー！ えー、お似合いのカッ
プルだったのにー。何でー？

「さあ、よく知らね。自然消滅らしいけど」

へえーそうなんだー。何か残念。

「うん。だから花ちゃんは今来ないんじゃないかな。お前タメじゃん。花ちゃんと連絡取ってないの？」

取ってない。

「なんだよ。仲良かったくせに」

「うーん、お互い忙しいし、仕方ないかな……」

亜美は答えにくそうなモヨモヨとした返事をした。

それにしても、楽しみだよね！ 理沙子さんも来るの？

「どうだろう。子供の世話があるからねえ……」

理沙子という名前が出たことに信義はざくりとした。ちょうど、その理沙子のブログを眺めていたところだった。赤い毛糸の帽子を被った、愛らしい男の子の写真が載せられている。

（女の第六感とは恐ろしい）

来るといいねえ。大好きだもんねえ、理沙子さん。

「そうだね。来てほしいな。りさたんは俺らのアイドルだし。だけど、一番好きなのは亜美だから。今日も声が聞きたくなって、電話したんだ」

ほんとにいいー？

語尾の上がりで、機嫌の良さが信義には分かった。

「本当だよ。愛してるよ亜美」

電話の向こうで亜美がプツと吹きだした。

うん。私も。

「じゃあ、今日はもう遅いから、またね」

うん。おやすみー。

電話はあっさりと、躊躇無くプツリと切れた。ツーツー鳴る音を、信義はぼんやり聞いた。

（付き合って五年以上経つのに、甘酸っぱい感じは無いよな。ただ、あの頃は　　）

信義の脳内で、大学のテニスサークル時代の思い出が鮮やかに展開される。海で遊んだときの理沙子の眩しい水着姿（白いビキニだ

った！）。「星だよ」と言って彼女にプレゼントしようとしたヒトデの死骸は、拒絶され受け取ってもらえなかった。砂で作った夢のマイホーム（城）は、無残にも祐二に蹴り崩された。

（祐二は高校からの腐れ縁だが、諸悪の根源みたいな奴だ）

憧れの存在だった理沙子が卒業し、後輩として花香と亜美が入部してからは、自然と仲良くなつて、いや、女の子たちのほうから積極的に絡んできて、四人でよく遊んだ。星が綺麗な夜には、恒例のように誰かが「流れ星を見に行こう！」と誘った。明かりの無い暗い場所を見つけたら、星見のスポットにした。花香は美人で大人っぽくて、亜美はそこそこ可愛くて子供っぽかった。祐二は当然、花香狙いだらうと信義が思っていたら案の定、二人は付き合い始めた。花香からの告白だったらしいが。その時、花香と亜美はもう二年に進級していて、信義と祐二も四年になっていた。そう、一年はあつという間だったのだ。桜が咲き、春めいた雰囲気に乗るように、信義は亜美に想いを告げた。

（そつえば、あの時どうして、亜美は泣いたのだろうか？）

幻影めいて白く浮かぶ夜桜が美しく、あの時は最高にロマンチックであった。深夜の公園にて、信義と亜美が椅子に腰掛けていた。周囲には他に誰もいない。妙にソワソワする信義に、亜美が「どうしたんですか？」と不思議そうな顔をしたのを覚えている。頭上から明りに照らされ、暗い中でも相手の表情が微かに分かった。亜美の長い睫毛が顔に影を落とし、奇抜な化粧を模した。中央にある池はただ真つ暗で、大きな穴のように見え、時々何かが跳ねる水音があるのが不気味だった。亜美はその雰囲気はどこか怯えているかに見えた。暗い方へは目を向けず、不安そうに信義を見つめていた。

「好きだ」

という言葉が信義が発した瞬間、亜美は小さく「え……」とつぶやいて、うつむいた。それから長い間が空いて、「どうしよう……」とうめいた。信義が「焦らないで返事をしていい。待つよ」と告げたときに、亜美は泣き出した。嗚咽を漏らして、何分も、何十分も、

泣き続けた。ひきつけを起こしたように背中が上下するのが、死ぬ前の動物を想像させ、信義を落ち着かない気持ちにさせるのだった。あのことが、付き合い始めても信義の中にわだかまりとして残ったが、口に出して問うことは無かった。今後も触れないつもりでいる。

信義はどうしようもなく過去のことが懐かしくなつて、パソコンの画面で当時の写真が収められたフォルダを開いた。そこには、楽しそうに笑う自分たちの写真がたくさんあった。何度開いてみても見るたびに胸が締め付けられる。もう戻れない輝かしい時間に思えるからだ。しんみりして、泣きそうにすらなつた。

幸せになろう。きっと皆が祝福してくれる。と、将来に対しての淡い希望を抱いて、パソコンの電源を落とす。夜の窓みたいになつた画面に残るのは、写真で見たのと大して変わらない顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0516z/>

流れるもの

2011年12月1日22時49分発行